

# 小野 才八郎（おの・さいはちろう）

## 1、プロフィール

作家。太宰治、亀井勝一郎に師事した。太宰関係の著作の他、創作集『冬の蛇』（昭和 41 年）、『イタコ無明』（昭和 59 年）、『一銭五厘の死』（平成 12 年）がある。

<生没>

1920(大正9)年3月 17 日～2014(平成 26)年8月 11 日

<代表作>

『太宰治語録』（平成 10 年 津軽書房）『太宰治再読』（平成 20 年 審美社）『太宰治再読 続』（平成 22 年 審美社）

<青森との関わり>

北津軽郡嘉瀬村出身。青森師範を卒業後、昭和 24 年まで、百石町、脇元村、鶴田町、内潟村で教職に携わった。

## 2、作家解説

大正9年3月17日、北津軽郡嘉瀬村長富（現五所川原市）にて、松川利一郎、スエ の次男として出生。2歳の時、両親の離縁により同郡内潟村上高根（現中泊町）小野家の養子となり、松川加吉から小野才八郎と改名する。同村立尾別（おっぺつ）尋常小学校から、青森師範学校へ進学。昭和 14 年上北郡百石町立一川目尋常高等小学校訓導となる。

同 16 年、同郡脇元村立脇元国民学校に異動。『冬の蛇』（昭和 41 年、審美社）には、当時の脇元が詳述されている。翌年、弘前市北部第十六部隊に教育召集。その後、同郡鶴田町立胡桃館国民学校の頃、東北第七十部隊に応召となり、八戸での軍務に精励した。軍役の概要と心境が、『一銭五厘の死』（平成 12 年、津軽書房）に詳述されている。

終戦後、同郡内潟村立今泉国民学校に異動となったが、同19年11月13日には、友人大高正博らと金木町に疎開中の太宰を生家に訪ねる。この日、小野らは6時間近くも滞在し、大いに太宰の薫陶を受け、「太宰道場」の門下生となった。同22、23年に三鷹に太宰を訪ねる。その詳細は『太宰治語録』（平成10年、津軽書房）に綴られている。翌年上京し、新宿区立戸山小学校などで教壇に立ち、同55年退職。師太宰亡き後、作家亀井勝一郎に師事し、「詩と真実」の同人となる。『太宰治再読』（平成20年、審美社）、『太宰治再読 続』（平成22年、審美社）では、「思い出」、「パンドラの匣」などの作品について、自身の記憶を踏まえながら独自の視点での論考がなされている。

実母桜庭スエの足跡を追った『イタコ無明』（昭和59年、審美社）について、小野が驚愕したことがある。それは、昭和6年、盲目のイタコ スエが口誦する「お岩木様一代記」を、竹内長雄（詩人、民俗学者）が筆録していたのである。（この間の事情については、坂口昌明「お岩木様一代記」2010年、津軽書房に詳しい。）

平成26年8月11日、肝臓癌により都内の病院で逝去、太宰の墓所がある三鷹市禅林寺に納骨された。「桜桃忌」では30年もの間、太宰の「雀こ」を朗読した。

### 3、資料紹介

#### ○『太宰治語録』

図書

1998（平成10）年6月25日

190 mm × 140 mm

「津軽人・太宰治」、「太宰治からののがき」など八篇が所収されている。「ああ、津軽風」には金木町での太宰との出会いが、「林檎籠図」には東京三鷹での別れが描かれている。他に、「太宰治語録」、「『雀こ』朗読三十年」など、興味深い作品がある。